

---

# SHI-NO -シノ- After Story

むらき ひろよし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SHI - NO - シノ - After Story

### 【ZPDF】

Z2183U

### 【作者名】

むらわ ひろよし

### 【あらすじ】

この作品はSHI - NO - シノ - のファンフィクションです。

時間軸は僕が大学3年生、志乃ちゃんが中学1年生と、最後の事件があつた時から1年が経過しています。

小説家になろうにはSHI - NOのファンフィクションがひとつもないのに、じゃあ自分が書いたらおうーと思い、筆をとることにしました。

まあでも所詮素人の書くもの、稚拙な文体や設定は御愛嬌。書いていじくうちに改善できるよつ努力したいと思います。

なので生温かい田で読んで頂けるとありがたいです（笑）

穏やかな日差しが降りそそぎ、優しく吹いている風が桜の花びらをふわりと舞わせている中、彼女は歩いていた。

俺が今年、これから入学する学校の制服、白いブレザーを着たその少女は腰まで伸びている黒髪を柔らかな風で揺らしながら静かに歩き、呆然と立ちつくして自分を見ている俺の方をその黒い、吸い込まれそうな漆黒の瞳でちらりと見た後歩き去っていった。

その瞬間、俺は恋に落ちていた。

「支倉志乃です。出身小学校は - - - - -」

彼女、名前は支倉志乃というらしい、と同じクラスになれたのは僕偉だった。これは運命というしかないだろう。彼女の出身校は俺でも知っているエスカレーター式の有名進学校だったのとちょっと驚いたが、そんなことは些細なことだ。彼女の淡々とした自己紹介が終わつた後も、その言葉ひとつひとつを頭の中で反芻することに没頭していると……

「おーい、次はお前の番だぞ」

教壇の前に立つてこのクラスの担任、中肉中背で中年の中本先生が言つてお前のことが俺のことであるのに気付くのに少しばかり時間が必要だった。どうやら彼女のことを考えているうちにいつのまにか俺の自己紹介の番になつたらしい。

俺は慌てて立ち上がり、どうやって彼女に俺の気持ちを伝えるか考えながら自己紹介を始めようとして……

「支倉志乃さん、俺と付き合つてくれー！」

クラスの中に満ちていたざわめきが一瞬で消え、シーンッと静ま

り返つた。

「あれ、俺今何か言つちゃつた……？言つちゃつたよね……やべえー！頭の中で考えてたことが出ちまつた！？」

一瞬音が世界から完全に途絶えたが、すぐに大きなざわめきとなって戻ってきた。驚きながらも苦笑いしている先生1名。隣の奴とこちらを見ながら話している奴多数。はやし立てる奴数名、そして俺と同じ学校だった奴らは呆れたり溜息なんかついてる。

いや、このさい外野のことなんかどうでもいい。問題は支倉志乃さんの反応だ。俺は急いで彼女の方を向いて、そしてそれに釣られて教室にいる全員が彼女の方を向いた。

彼女は公衆の面前で告白されたのにもかかわらず、俺が初めて見た時から変わらぬ表情を全く崩さず、何を考えているかわからない顔をしている。まあそんな表情も魅力的なわけだが……つて何考えてるんだ、俺は……！？

と、脳内セルフボケ&ツッコミをしながら、俺は彼女のことを見つめただ。クラスメイトも、そして先生すらも彼女の答えを声も身じろぎすらもなく待つていると、徐に彼女は立ち上がり、短く一言、

「じめんなさい」

とぺこりと頭を下げながら言つた瞬間、俺の記念すべき通算100回目の告白は見事に玉砕したのであつた……

自己紹介その他諸々が終わり、休み時間になつた後も起き上る気力が出ずに机にばつたりと倒れ伏している俺の前に誰かがやつてきた。

「お前も本当によくやるよな……」

俺の小学校時代からの悪友、林真<sup>はやしまた</sup>が溜め息交じりに苦笑いした。

「これで告つたの何回目だよ？」

「幼稚園のころから数えると、記念すべき100回田だな」

俺が起き上り、胸を張つて言つと、親友の真さんは何やら残念そ  
うな田で俺を見る。

「はあ……まあお前の一田ぼれ＆即告白は小学校の頃から何度も見  
てたからわかるけどよ。いくらなんでも新学校、新クラスで速攻や  
らかすとは思わなかつたぞ。唯でさえ前回の時は……」

「そう言いかけて真は口をつぐんだ。

「いや、わりい。その話はあんまりしたくないよな……」

「別にいいって。もう昔のことだし」

俺はへらへら笑つて自分の心の一部にぽっかり空いているところ  
が軋むのを感じながら誤魔化した。

「でもよお、お前つてもつと明るい娘とか胸でかい娘が好みじゃな  
かつたつけ？支倉はどう見てもツルペタ根暗少女つて感じじやん？」

「おいおい、仮にも初対面＆お前のソウルブラザーである俺が告白  
した娘に對してその言い方はないだろ……」

「ま、確かにかわいいし、髪もすんげえ綺麗だし、数年後が楽しみ  
ではあるな」

「お前は中年オヤジか……」

俺のツッコミに對して、真は表情を思案げな顔からニヤニヤ笑い  
に変えて、俺に尋ねてきた。

「で、お前はこれからどうするんだ？まさか一回ぶられただけで諦  
めるのか？」

そんな悪友兼親友兼ソウルブラザー兼竹馬の友の真葉に、俺は不  
敵に笑つて答えた。

「あの玉砕王桜木を超えた男である俺が、そつ簡単に諦めると思つ  
か？」

「そう言つて俺は立ち上がり、彼女の元へと向かつた。

春 - 新たな出会い - (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

更新は不定期になると思いますが、気に入つていただけたら継続  
が少しでも気になつたら、お気に入り登録お願いします。

## 01 (前書き)

何だか意外と早く書けてしまったので短いですが更新します。

「支倉さんも災難だつたねえ」

「あいつ一目惚れすると誰かれ構わず告白するから、あんまり気にしない方がいいよ」

「そう……」

支倉志乃の周りには人だかり（100%女子）ができていた。まあ俺の告白があつたからということが大きいのだろうが、彼女がわざわざ有名私立からこんな平凡な市立に来た理由や、体の小ささとは真逆の大人びた雰囲気なども彼女達の興味を引いたのだろう。

質問責めにされている支倉は「見た目の人を寄せ付けなさそう」な雰囲気とは裏腹に、質問されたことには全て短いながらもちゃんと「そう」や「特には」などと答えて意外にちゃんと話しかけていた。

「支倉、ちょっとといいか?」

「あ、あんた、いつたいどうこうつもりなのよ。こきなり告白なんてして!」

支倉の周りにいた女子の内の一人、小学3年からの付き合いの綾<sup>あ</sup>香<sup>やか</sup>が開口一番突っかかってきた。

「いやあ……本当は学校の裏にでも呼び出されると想つてたんだけど、ついつっかり」

「いや、あんたねえ。はあ……」

呆れかえつたように溜息をついて話しが途切れたので、俺はすかさず支倉にもう一度尋ねた。

「で、ちょっとといいか」

支倉は少し考えこむよつた仕草をしたが、すぐに小さく頷いて立ちあがつた。

「かまわない」

「じゃ、ちょっと支倉を借りてくぜ」

「ちよつ、まだ話しあはー！」

綾香とその他の引きとめようとするのを無視して、俺は支倉の手を掴み急いで教室を飛び出した。

「で、話しあはー？」

本当に学校の裏へ行くのは面倒だつたので、とりあえず屋上に入る扉の前の踊り場（扉の鍵が閉まつていたため）に着いたあと、すぐ尋ねてきた。

「いや、まあわっかの告白の件なんだけど……」

支倉のあまりにも淡白な言い方に、俺は緊張が解けて逆に少し啞然としながら本題に入った。

「なんで駄目なのかな？ やっぱり初対面だからとかか？」

俺の問いに支倉はなにやらまた少し間をとり、そして簡潔に答えた。

「それもある。でも、それ以前に私には今現在付き合つている人がいる」

「えつ、そなうなのか？」

俺は驚きの声を上げた後、それほどどの女子たひと同じくひに質問攻めした。

「もしかして、同じクラス？」

「違つ」

「じゃあ小学校の頃の奴か？」

「違つ」

「それじゃあ、まさか年上？ 2、3年生とか？」

「……中学生とこつ意味なら違つ

「じゃあまさか、高校生！？」

それはこくらなんでも年が離れすぎてこりだらう。案の定答えは

「違つ」

だつた。でもそれならいつたい？なんだか謎かけみたいだな……

「じゃあ、大学生とか」

俺が苦笑しながら冗談で尋ねると、その時だけ今まで即答していなかった回答が返つてこなかつた。

「…………」

「え？ なに、この間は……？」

「さすがに大学生と付き合つてゐるわけないよなあ。あははは……」  
しかし俺の笑い声は何の反応も示さない支倉の表情を見て、ついに尻すぼみになつてしまつた。

「いや、まさか、ねえ？」

「質問は終わり？」

「えつ？」

人形のように何もしゃべらなくなつた支倉が急にしゃべりだした  
と思ったら、俺の答えを待たずになつと立ち去つてしまつた。

「えつ？…………つて、ええええええー！？」

俺の驚きの声が、誰もいない踊り場に響き渡つた。

「で、なんでお前ら今まで付いてくるんだよ？」

俺は電柱の裏に隠れながら、後ろを振り返つてなぜか付いてきて  
いる真と綾香に尋ねた。

「なんでつて、そりゃあオモシロそうだからな」

「あ、あたしはあんたが暴走してシノちゃんに迷惑かけないよう  
見張るためよ！」

「つてバカ！ 大声出すな！」

慌てて綾香の口をふさぎ、ちらりとかなり離れて前を歩いている  
少女、支倉志乃の方を見た。どうやら気付かれてないらしく、一定  
のスピードで歩いている。

「つたく、だいたいなんで尾行なんとしてるのよ？」

「そりゃあ……」

そう、俺は放課後になつて、支倉が帰る後を付けることとしたのだ。彼女が答えなかつた問いがどうしても気になり、その行動を見ていれば何かわかると思ったのだ。

「別にいいだろ。つて、あ、ちょっと離れすぎた！」

俺は急いでこそこそと次の電柱へと向かつた。

「あつ、ちょっとー！」

「あんまり慌てると見つかるだ」

そんなことを言いながら、俺たちはひそひそちの支倉の後を追い続けた。

「いじか？」

「いじみたいだな」

角を曲がつた先のぼりアパートの階段をのぼりだした支倉を見て呴いた俺の問いに律儀に真は答えを返してきた。

「でも変ね。支倉さん家つて結構良い所に住んでるつて話しだつたけど……」

女子はそんなことまで出合つてすぐ口話すのか……

「でも、支倉はそういうことで見え張りそうなタイプには見えないけど？」

「確かに……」

俺と綾香が考え込んでいると、真が小さく声を上げた。

「おい、誰か支倉に手え振つてるぜ」

向こう側の道から買い物帰りなのかスーパーの袋を片手に持つた大学生くらいの青年が支倉に向かつて手を振つていて。それに気付いた支倉は階段の中ほどで立ち止まり、また降りて今までの一定の歩くスピードを崩し、彼の元へ小走りで駆けよつていつた。そして何やら楽しげに話す男の手を支倉はしっかりと握つた。

「兄弟とか？」

「んー……一人っ子って言つてたけど……」

一人にはさうはり状況が飲み込めないようだが、俺には心当たりがあった。

「ん? おい、ちゅうと。おれ、またか! ?」

真が何かに気付いて俺を呼びとめようとするが、しかしもう遅い。

俺は一直線に支倉達のところへ向かい……

「あれ、何かもの凄い形相で睨んでくる志乃ちゃんと同じ学校の制服の子がいるけど、知り合いい？」

能天氣にも少し驚いた顔をしながら支倉を名前で呼んだ。そいつは

二〇四

「へつ？」

俺は渾身の力を込めて、そいつの腹目がけて拳を放つた。

俺の拳はやいにはだらす空を切った……と「JIN」がなせが俺の視点は真っ逆さまになつていた。

そしてその後、ぐるんと一回転した世界はまた元に戻り……

かはー!?

俺の意識は後頭部に響いていた痛みと、双の耳を籠めながら、ハ

ハーディングトントレーニング

## 01 (後書き)

シシ「」や感想、誤字脱字等ありましたら感想の方にお書き頂ける  
とありがとうございます。

「ん……ううん……いいのは……？」

僕の布団の上に寝かせていた彼が起きたのを見て僕は慌てて駆け寄つた。

「あ、君、大丈夫？ 綾香ちゃん、真君、彼、起きたみたいだよ」  
僕の慌てようとは裏腹にのんびりとした調子で綾香ちゃんが台所からやつてきた。

「はい……あ、ほんとだ。やつと起きた。もう、いつたい何がしたいのよ、あんたは……？」

「確かに、いきなり殴りかかるのは意外性がありすぎて逆に意味わからん」

ちゃぶ台の前に座つてお茶をすすつていた真君も一緒になつて日々に聞いたてられる中、未だにボーつとしている彼は頭に手をやつて、

「いてつ！？」

と少し呻いた。

「はい、これ。頭冷やしなさい」

彼女が差し出した濡れたタオルを素直に受け取つた彼は頭にタオルを当てるこ�数秒、だんだん頭がはつきりしてきたのが、

「俺、何で……つてか、ここどこだ？」

「ここは僕の家だよ。君はなぜか僕に殴りかかつてきて、それを志乃ちゃんに反撃されたわけ」

志乃ちゃんという言葉に彼はびくつと反応し、そしてまるで初めて見るかのように僕の顔をまじまじと見て……

「…………ああああ！？ お前、口っこ野郎！」

と叫んだかと思うと、またこちらに掴みかかつとして……

「つて、やめんかい！」

綾香ちゃんのシックルの張り手がタンゴブができるところといふ

クリーンヒットし、痛みで転げまわる少年。なぜかその姿にこちらに對して敵意を剥き出した相手にもかかわらず、同情といつか親近感を覚えてしまった。

「ていうか、お前さつきものこの人のことロココソとか呼んでたけど、いつたいなんでだ？」

それは僕も気になつていたところだ。真君がもつともな質問をすると、彼は僕をびしつと指差して叫んだ。

「こいつは支倉と付き合つてるんだ！ 壁間からぞひきみたいにいちやこちやして、そんで夜な夜なあんなことやこじんなことをしてるんだ！！ たぶん……」

最後の方は自信が無いのか尻すぼみになつたものの、その言葉に、部屋の中がシーヌとなつた。

えつと、彼は一体全体何の話をしているんだ？

「お兄さん、純朴そうに見えて、鬼畜さんだったんですね……」

「さすがに大学生が小学生体型の中学生と付き合つのはまずくないですか……？」

綾香ちゃんと真君がじとーっとした視線で見てくるのに對し、僕はただただ混乱するばかりだった。

「それって、僕と志乃ちゃんが付き合つてること？ 一体誰がそんなこと言つたの？」

「支倉が自分で言つたんだよ」

その言葉で、僕達は一齊に振り返り、いつもの部屋のスニーカーで志乃ちゃんは僕達の視線を一身に受けているのにもかかわらず、いる志乃ちゃんの方を見た。

志乃ちゃんは僕達の視線を一身に受けているのにもかかわらず、全く動搖せずにただ一言、

「いちやこちやしてないし、夜は一緒に寝てるだけ……」

「いや、そこを否定しても……」

僕が顔を引き攣らせながら咳くと同時に、彼がまた勢い込んでしゃべりだした。

「ていうか、やっぱり一緒に寝てるんじゃねえかよー」

「シノちゃん、もつそこまでしちゃつてるんだ……」

「最近の中学生は進んでますなあ」

未だに起きてから時間が立っていない＆頭に血がのぼっている彼以外は完全に状況を楽しんでいる…… その証拠に、綾香ちゃんは両手を顔に当ててきやーきやー言いながらも指の隙間から覗いている目が笑っているし、真君も顎と口に手を持つてきてもつともらしくふむふむと頷きながらにやにやしているのが丸わかりだ。 なんで僕の周りにはこう人をからかうのが3度の飯より好きなばかり集まるんだろうか……

「はあ、不幸だ……」

これでは某不幸体质の主人公のセリフも出てこいつとこいつなのだ。しかし、こういう時のお約束で、自分が不幸だと思うとさらに不幸なことが降りかかるつことを僕は忘れていた（まあ覚えていたとしても回避不可能だつたるつけど……）

「じゃまするでえーーー！」

ノックもせずに勢いよく扉を開けて入ってきたのは、誰であろう

鴻池キララ先輩だった。

「なんや、チビッコどもがいっぴいやなあ。シノシノの友達か？」  
義足を付けているとまったく感じさせないほどスマーズに、ズカズカと何の遠慮もなく上り込むキララ先輩のことを見ながら、先輩も彼らのことをチビッコと言えるほど大きくないようなんてことを心の隅で思つた瞬間、先輩のボディーブローが僕の腹に見事に決ました。

「ほんと、学習能力つてもんがないんやなあ、あんたは」

腹を抱えて前かがみになつてしまつた僕にさらにくっドロックを決める先輩。

「あんたのその思考ダダ漏れの表情を何とかせんと、そのうち痛い

目みるで？

「げ、現在進行形で、あつてます……つて、ギブ、先輩、ギブです……ー？」

氣絶する少し手前でやつとキララ先輩は僕のことを解放してくれた。慣れたもので完全に加減を把握されている……

「けほつ、けほつ……で、先輩、今日は何の用ですか？」

今年から警察官になるキララ先輩がこんなとじりで油を売つていいのだろうか？

「なんや、うちが用もなく来たらあかんのか？それとも、一人の愛の巣の邪魔をされたくないんか？」

「いや、別にそういうわけじゃ……つて、また変なこと言わないで下さいよ！」

いつも先輩がここに来るのは事件のことばかりだったのでついつい勘ぐってしまうのだ。まあそれもこの1年間ほとんどなかつたのだけれど……それより、今僕と志乃ちゃんのことを変な風に言われるのは非常にまずい。

「なにをそんなん慌ててんのや？」

キララ先輩の先ほどの言葉に、いきなりの闖入者に驚いて固まつていた彼がまた動き出した。

「つて、やっぱあんたと支倉はそういう関係なんじゃねえかよ…」「ん？ なんなん、このぼうず？」

キララ先輩は彼のことをじっと見た後、続いて少し離れて状況を見ている真君と綾香ちゃんに視線を向け、最後にいつもの定位位置にいる志乃ちゃんの方を見て考え込むこと数秒、キララ先輩の並外れた状況把握力がここで今何が起こっているのかを導き出したことをその後のにたあーつという表情が示し、僕は状況がさらに混乱することを覚悟させられた。

「つまり、あんたはシノシノのことが好きで、シノシノといつこの愛の巣に殴り込みをかけたつちゅうことか」

「……つていうか、そもそもあんただれ？このロリコンが先輩とか

呼んでたけど、まさかそのなりで20歳超えて……って、いててて  
てて！？」

「な・ん・か、今お姉さんに言つたかなあ？」

先ほどの僕と同じようにヘッドロックをかけられた姿は、なぜだ  
かクロス君の姿を思い出された。

僕はとりあえず、これから僕、クロス君に続き、先輩のおもちゃ  
になるであろう彼に静かに黙祷を捧げた。

「つて、お前ら、見てないで助ける……つていうか、助けてくれえ  
！？」

彼の悲痛な声はキララ先輩が満足するまで続いた……

「何だか、色々あつた1日だつたね」

僕がよそつたご飯を志乃ちゃんに運んでもらいながら、ため息交  
じりに呟いた。

あの後キララ先輩の愛人発言でさうした混沌と化した場を終わらせ  
たのは同じ階に住んでいる女性の「うるさい」の一言だった。その  
後あやふやに解散することになり（彼は綾香ちゃんと真君に引きず  
られていった）、キララ先輩もただ単に僕たちの顔を見に来ただけ  
らしく、すぐに帰ってしまった。

「でも、よかつたよ。志乃ちゃんにも友達ができたみたいで」  
食事の用意が終わつたちやぶ台に座つた僕に対して、志乃ちゃん  
は短く、

「そう……」

と呟いた。

彼女は人と人が本当の意味で分かり合えないことを知つてゐる。  
昔はそのことから他人を拒絶しないまでも積極的に関わろうとした  
かった。それが今では（理由はともかくとして）家に来てくれる子  
までできたのだ。

本当は記念においしいものでも作るべきなんだろうけど、あいに  
く1年前からほとんど進歩していない僕の料理の腕ではいきなり御  
馳走を作れるわけがなく、今日もいつもと同じような献立だ。

「でも、なんで僕のことを彼氏とか言ったの?」

「そう、たとえ断るにしても、もつと上手い言い訳があつたのだと  
思つのだ。というか志乃ちゃんがもつと穏便に済ます言い方を知ら  
ないはずがない。

「迷惑だつた?」

「えつ?」

まじまじと見てしまった志乃ちゃんの顔はいつもの「とく表情が  
分かりにくいくらいだつたが、今回のは自称シノシノティマーである  
僕が見ても読みにくく、というかあまり見たことがない表情だつた。  
「もしかして、拗ねてる……?」

いや、そんなわけないだろ?……と脳内でセルフツッコミを入れ  
ながら苦笑いして、頭を切り替えて本題に入った。

「いや、志乃ちゃんのことだから何か考えがあるのかなって」

「そう……」

あれ、間違えた?でもおかしい。いつもならもじトーンチンカンな  
ことを言つたら、あのどんな人だろうが惨めにさせられる視線を投  
げかけてくるはずだ。なのに志乃ちゃんはこちらから視線を外し、  
ついているテレビを見だした。

「なにか気に障るようなこと言つちやつた?」

「別に……」

んーこれはまずいかもしれない……。うつなると頑固な志乃ちゃん  
は挺でも動かない。

どうしようかなと迷いながらも、空腹に抗えず、冷めてしまつた  
も勿体ないので食事にとつかかることにした。

ぴちょんつ、ぴちょんつ……

しつかりと閉まつていない蛇口から水滴が一定の間隔で滴り落ち、メトロノームのような正確さでリズムを刻んでいる。

俺はそれを止めるのすら億劫で、湯船に体を沈めながらぼーっとしていた。普段はカラスの行水並みの速さでさつと入つてさつと出るのが俺のスタンスなのだが、考え方をするときにはつい長風呂になつてしまつ。

その考え方とは勿論支倉志乃のことだ。真と綾香に引きずられて帰つた後、一人になつて初めて俺がどんなことアホなことをしたのか自覚した。

考えてみれば、中1が大学生と付き合つなんてありえない。普通ならそんなこと冗談だと思うか、マセガキが年上に憧れて妄想していると考えるくらいだ。

いくら支倉がそういう類の冗談を言いそうにないにしても（マセガキの方は……ありえないだろ）普通は最初にその言葉を嘘だつてだろう。

ではなぜ俺が支倉の後を付けてまで確かめたかつたか、それは先ほど頭の中で並べた常識を通り越して、なぜだか信じさせる雰囲気を彼女が孕んでいたからだ。

さらに、あの大学生。見た目はただの平凡な、どこにでもいそうな普通の一般人A。映画やドラマだつたら通りすがりのエキストラ程度の役割しか与えられそうにない人相。

なのに、あのロリコン野郎はどこか似ていた。俺が初めて本気で付き合つたあいつと……もう、会うことのできない、あいつと……

一瞬ロリコン野郎の顔にあいつの面影が重なり脳裏を過つたが、すぐに俺はそれをかき消すよつに掌でお湯を掬い、顔にばしゃんつ！勢いよくかけた。

「はあつ、はあつ、はあつ……」

僕は薄暗い闇の中、駅へと続く大通りのど真ん中を走っていた。普通ならどんな時間帯でも最低数台は走っている車は影も形もない歩道にも人影はなく商店街の店もからっぽで、まるでゴーストタウンのようだ。

「いつたい、どうなつてるんだ……？」

誰も答えてくれる人がいないとわかつていても、呴かずにはいられなかつた。人がいないというのもあつたが、さらに薄氣味悪いのが大気を満たしている紫色がかつた薄い霧だ。こんな現象は初めて見た。

まさか自分は異世界に来てしまつたんぢやないか、そんな突拍子もない考えが浮かんでは否定する、そんなことを脳内でもう何度も繰り返している。

「僕は……」

息が切れてその場でゼえーゼえー言いながら立ち止まる。そしてその行動はものすごく幸運なことだつた。

ズドーーーーンッ！ー！

「わあーーー！？」

目の前に何かが落下した衝撃で、僕は数メートルは吹き飛ばされた。運よく怪我をしなかつたらしく、体はちゃんと動き、しかし粉塵が消え前を向くとそこにはその場で死んでいたほうがよかつたんじやないかと思わせるくらゐ絶望的な存在がいた。

「りゅ、竜……？」

そう、僕の目の前にはファンタジーの悪役やラスボスで出てきそうな禍々しい姿をした1匹の巨大な竜<sup>リヤウ</sup>が紫電をまき散らしながら立っていたのだ。竜の着地したところは地面が数メートルはクレーター状に陥没していて、もしあの時立ち止まつていなかつたら確實に

死んでいただろう。

いや……

「もしかすると、ペちゃんこになつてた方が楽だったかな……？」  
僕は恐怖で思考が停止し、金縛りにあつたかのように指一本動かせず、こちらに気づいた竜が突つ込んで来るのをただ見ていることしかできない。

そして竜の顎アギが僕を噛み砕くとした瞬間……！

「防御」

「Protection！」

僕と竜の間に黒い小柄な人物が割つて入り、突き出した杖が黒く輝く円盤状の物を出して竜の突撃を弾き返した。

弾き返した衝撃が突風となり、硬直していた僕を打ち、尻餅をつかせる。

「……もしかして、志乃ちゃん……？」

呼ばれて振り返った人物は、まさしく支倉志乃その人だった。しかしその姿はいつもの志乃ちゃんとはかけ離れたものだった。

まず服が黒を基調にした魔法少女が着ているような、普段着としてはかなり着ているのに勇気がいるデザインで、手にはこれまた機械的な魔法の杖っぽいものを持っている。

それでも、吸い込まれそうな漆黒の瞳や感情の起伏の少ない顔はまさしく志乃ちゃんそのものだった。

「離れて……」

「え、あ、そ、そうしたいんだけど、腰が……」

志乃ちゃんのことを見上げながら体を動かそうとしたのだが、体がまるで自分のものじゃないかのように言つことを聞いてくれない。そんな僕を志乃ちゃんは見つめること数秒、深い、物凄く深いため息を一つついて……

「移動させて……」

「A'right, Master! Remove!」

「えつ？ つて、ええ――――！？」

杖が光を帯びたと思うと、僕の体がふわりと浮かび上がり、近くのビルの屋上へと運ばれていく。人生初の空を飛ぶのがまさか飛行機ではなく魔法でとは……

我ながら妙な経験だけ蓄積していくな……と、どうでもいいことを考えながら、眼下で行われ始めた戦闘を見始めたのだが……

「吸收」

「Absorb!」

竜が纏わせていた雷があつという間に志乃ちゃんの持つ杖に吸い込まれていった。

呆然とする竜に対し、志乃ちゃんは淡々と杖を向ける。

「スタンガン……」

「OK, Master! Mode Stun gun!」

漆黒の杖がガチャンガチャンと変形していき、巨大な黒光りするスタンガンへと姿を変貌させた。

後ずさり、空へ逃げようとすると竜に、志乃ちゃんはたつた一度の踏込で相手の懷へと潜り込み、一言

「放電」

と呟いた。

「Kill it!」

杖が答え、そして竜は自らが纏っていた雷を数倍以上の威力にされたものをもろに喰らつた……

「志乃ちゃん、いったい何がどうなつてゐの……？」

「あなたが知る必要はない」

竜を倒した後、僕がいるビルの上までふわりと飛んできた志乃ちゃんは僕を一警すると、徐に杖を構えた。僕の方に向けて。

「えつ……？」

「あなたには関係ないこと。よつて、あなたの記憶を消します。」

「ちょっと、ちょっと待ってよ、志乃ちゃん！？そんな、本気じゃないよね……？」

しかしこれもならどんなにわずかな変化でも読み取れる自信があるその表情からは、意図的に感情を隠しているとしか思えないくらい何もわからなかつた。

「記憶を消……」

そして志乃ちゃんが僕に向かつて杖を振ろうとしたその瞬間！  
「ちょっとまちいや――――！」

志乃ちゃんの後方、ビルの乱立している場所から、一つの人影がビルの屋上を飛び跳ねながらこちらに近づいているのが見えてきた。最後にビル2つ分ほどの間隔を一気に大ジャンプをして僕たちがいるビルの上に飛び降りたのは……

「キララ……先輩……？」

赤いロングコートに黒い戦闘服を身に纏っていたのは紛れもなくキララ先輩だつた。そして先輩のただの棒のようなものだった義足は機械的なものになつていた。

「まさか、鍊金……？」

「シノシノ、あんたこの状況でまだこいつに隠し通すつもりなんか……？」

キララ先輩が赤いマントを吹きすさぶ風にはためかせながら、真剣なまなざして志乃ちゃんに問いかけた。

「この件に関しては、彼は知らないほうがいい……」

「うちはすべてを話した方がいいと思うんやけどなあ」

どちらも一步も自分の意見を譲らない様子（そして何が起こつているかわからない僕は完全に蚊帳の外だ）

「どうしても邪魔をするというなら……」

「実力で排除するつていうんかい？」

臨戦態勢に入る二人とも。そして僕はといつと、情けないことこの一つも出せない。

「それじゃ、いくだえ！」

徐に胸に手を当てたキララ先輩。そして胸元が赤く輝いたかと思うと、六角形（ヘキサゴン）をした銀色の物体が掌に収まっていた。

「武装 金！」

「つて、それ鍊金違いじゃつー?」

「がばつ！」と起き上ると、そこは僕の部屋だつた。そしてDVDプレイヤーが繋がれたつけっぱなしのテレビがとあるアニメ3期のDVDのメニュー画面を映している。

「……夢？」

寝起きの頭が覚醒していき、だんだんと状況が呑み込めてきた。

「そつか、昨日借りたんだつけ……」

そう、昨日志乃ちゃんが珍しく両親が家にそろつてているそのうで、久しぶりに家に一人だつたのだ。で、志乃ちゃんが帰つた後同じアパートに住んでいる女性に以前から見ると約束させられたアニメのDVDを借りたんだつた。

なぜ僕がそんな約束をさせられたかはまたの機会に話すとして、とにかく感想とかも言わなくちゃいけないので昨日は夜中ずっと見ていて、どうやらそのまま寝落ちしてしまつたらし。

しかし……

「なんでもを見たんだ、僕は……」

ふつ、と少し笑いが込み上げてくる。

志乃ちゃんが魔法少女つて、どんな設定だよ。そりやあ彼女はあいう服が似合いそうだけど（というかどんな服でも似合つのが）ありえないでしょ（笑）

そんなことを考えながら、志乃ちゃんが確か朝来るといつていたのを思い出し、立ち上がって朝食の支度をしようとしたら……

「……

ありえないものが目に入ってきた。

「おせむいじゆ二叶か」

「やんその人が体育座りをしていたのだ。まあでも志乃ちゃんは家の鍵を持つてるし、そこにいること自体はおかしくない。ただ……夢なのに、夢じゃなかつたあ——！？」

「そう、志乃ちゃんは魔法少女の格好をしていたのだ。

作中で僕がリリカルでマジカルというセリフを知っていたのが不思議だったので、この一幕を入れてみました。

志乃ちゃんが某魔法少女、キララ先輩は某チビ鍊金術師と見せかけて鍊金の戦士というわけのわからない設定でしたが、まあそこはファンタジックションということで気にしないでください（笑）

本当は真白ちゃんやクロス君も出そうと思ったんですが、これ以上やると收拾つかなうなので、彼らの出番はまた後になります。

次回更新は書きかけの作品がなんとか形になつたので、来週中にはできると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2183u/>

---

SHI-NO -シノ- After Story

2011年7月10日03時50分発行